



まず、わが国のヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチン接種の現状を示してみよう。HPVワクチンが子宮頸がん予防の強力な選択肢となるという世界的な潮流として、わが国でも政府の積極的勧奨が行われ、2013年当時その接種率は70%を超えていた。しかし、ワクチンの副反応と診断された少女の神経障害がメディアで大きく取り上げられ、積極的勧奨は差し控えられて6年が経過した。今ではHPVワクチンの接種率は1%未満にまで激減、ワクチン接種を希望して婦人科外来を受診する少女は皆無である。

子宮頸がん予防HPVワクチンの現状

情報広報部長 藤井 美穂

わが国では子宮頸がんが増加しており、年間10,000人が治療を受け、3,000人が死亡している。子宮は残存したものの約13,200人が前がん病変で子宮頸部円錐切除術を受け、不妊、流早産のリスクにさらされているのが現状である。

一方、世界ではHPVワクチンで子宮頸がんの前がん病変である頸部異形成病変は大幅に減少している。スコットランドでのHPVワクチン接種による子宮頸部疾患予防効果を後ろ向き研究で検討した結果、子宮頸部上皮内腫瘍グレード3以上(CIN3+)の有病

率は、1988年に出生したワクチン非接種女性に比べ、ワクチン接種をした女性では89%低かった(0.59%から0.06%へ低下)。CIN3+に対するワクチンの有効率は接種年齢12-13歳で86%、17歳で51%だった。さらに、米テキサス大学では、HPVワクチン導入による集団免疫のベネフィットを受け始めていることが示唆されると報告している。すなわち18-26歳の女性で、ワクチン接種を受けた群ではHPVへの感染率は低く維持されており(2009-2010年は3.9%、2013-2014年は2.0%)、

同じ年齢層のワクチン未接種群では、2009-2010年の19.5%から2013-2014年の9.7%と、有意な減少が認められたという。



子宮頸がんはワクチンで定期的な検診とで予防できます。
私たちは子宮頸がんワクチンをお勧めしています。
釧路小児科医会、釧路産婦人科医会、釧路市医師会

本年7月28日に第38回北海道思春期研究会が開催され、「思春期・AYA世代の健康を考える」をテーマに講演を通して有意義な情報交換が行われた。HPVに関する講演の一つ、北大に設置されたHPVワクチン副反応支援センターからの報告も、厚生労働省が指定した有識者による副反応検討部会で報告した、2013年当時からHPVワクチン接種後に生じている様々な症状とHPVワクチンとの因果関係は認められないとの内容と同様だった。わが国のHPVワクチン空白の6年間で産婦人科医師としての社会的役割を忘れていたと気付いた。現日本産婦人科医会副会長である石渡 勇先生は日本医師会の代議員会でHPVワクチンの積極的勧奨について毎回質問を続けており、日本産婦人科医会は本年7月10日、「HPVワクチン接種の積極的勧奨の差し控えをこれ以上継続する合理的な理由は見当たらず、リプロダクティブヘルス・ライツの観点からも容認できることではない」と訴え、HPVワクチン接種の積極的勧奨再開を求める要望を厚生労働省に提出している。

同時期に、釧路市医師会理事の堀口貞子先生から、釧路小児科医会が中心となって、釧路産婦人科医会、釧路内科小児科開業医会、釧路市医師会の賛同のもと、まさに「オールくしろ」で子宮頸がんワクチンと検診の推進ポスターを作ったと連絡があった。本文に添付したポスターの可愛い少女達は釧路のバスケットが大好きなチームのメンバー。まさに手作りの地元発信のエネルギーだ。笑顔のあなた達、救える命を救わなければ。あまりに素敵だったので画像入りの原稿にした。